

ウグシク情報

ウグシク(御城)とは、首里城のことです。元々は敬称ですが、首里では今でも親しみを込めてこの呼び方をしています。

大名むらあしびにて組踊上演

一月二日、「第五回大名むらあしび」が大名町児童館で開催されました。本イベントは伝統芸能を通じて地域住民の交流と活性化を目的としており、地域の芸術者による琉舞、白舞、三線の披露、さらに地域住民の出演による組踊「執心鐘入」が初めて上演されました。「執心鐘入」は、舞台となった遍照寺跡が大名町に隣接する末吉公園内にあり、地域にゆかりのある組踊の演目。昨年八月から、首里系組踊研究家の知念有さんの指導で、首里クトゥバ(言葉)によるセリフや振舞の練習を重ねてきました。

本番では、初心者とは思えない堂々とした演技を披露しました。「首里言葉は聞きなれていても、実際使うのは難しかった」と「宿の女」役の大底紀子さん。「鬼女」役を演じた嘉陽田詮さんと共に、舞台の成功に満足そうな笑顔でした。



「鬼女」役の嘉陽田詮さんと「宿の女」役の大底紀子さん



辺戸大川へお水取りに向かう

正殿東側御内原での献上の儀

王城の公事「辺戸のお水献上」

琉球王朝時代、辺戸とその年の吉方の水を汲み、国王の正月の若水として献上する儀式がありました。この儀式の再現行事は一九九九年より実施され、昨年十二月も国頭村辺戸と首里城周辺で行われました。

十八日早朝、スタッフと首里王府の使者役の当蔵町関係者、お供役の啓扇船の会の皆さんを乗せた大型バスが本島最北端をめざし出発。辺戸岬間近では伊是名島へ架かる大きな虹が出迎えました。行事は神アサギでの祈願より開始し、辺戸大川にて若水が汲まれ、シチャラ嶽、祝女殿内での祈願を終え首里へ向かいました。

翌週の二五日には、首里にて「首里王府(ウグシク)への美御水(ヌービー)の奉納祭」が行われました。龍潭通りを練り歩き、円覚寺での奉納儀式の後、正殿東の御内原にて取り次ぎの女官へ若水が受け渡されました。この一連の再現行事を経て二〇〇六年の新年を迎えることができました。

七回目となる今回、首里から使者が出たことに感謝します。

(実行委員会委員 山城岩夫)

首里城花まつり

首里城公園では、一月二日から二月二六日までの期間、「首里城花まつり」を開催しました。海洋国家として繁栄した琉球王国の姿を草花の造形物で表現し、正殿や南殿、番所内では、国王や役人たちの姿をラン人形で表現しました。また、毎週土・日には、紅型衣装の披露や国王・王妃の御出など、来園者に首里城の新たな魅力をアピールしました。



冊封使

紅型衣装の紹介



琉球国王

首里かわらばん Vol.4

琉球歴史回廊

首里の伝統菓子

特集

インタビュー
琉球菓子研究家

安次富順子さん

沖縄の伝統菓子にはふたつの系統があるといわれます。ひとつは王国時代に王家や上流階級の家で食べられた「琉球菓子」、もうひとつは家庭でも作られるおやつ系の系統です。首里では、祝儀や行事などの様々な場面で伝統菓子に出会えます。今回は琉球菓子の研究をしている安次富さんにお話をうかがいました。



首里には魅力的な歴史資源があると同時に、それを支えて活動する人たちがいます。この首里かわらばんでは地域で活躍している人たちを紹介していきます。

琉球菓子の歴史と特徴
記者：琉球菓子はどのような歴史を歩んできたのですか。

安次富氏：琉球料理や菓子は、中国と日本の両方の影響を受けて発達してきました。中国については冊封使(さつぽうし)のもてなし、日本については、薩摩の在番奉行の接待や江戸上りなどの本土への往来が影響しています。琉球側からは「厄丁役(ほうちょうやく)」という料理職人を中国・薩摩へ派遣し、料理や菓子を学ばせてきています。当時の琉球菓子は、宴席や儀式の供物などで出される高級品のため、首里の上流階級しか食べることができなかつたそうです。それが廃藩置県以降に、専門店ができて次第に普及してきます。しかし現代の洋・和菓子に押されて多くが消えつつある状況です。

記者：歴史的には、何種類くらいが確認できるのでしょうか。

安次富氏：琉球菓子を知る歴史資料は、冊封使を歓迎する時の記録など九点が確認できます。これらの文献には一六〇種類もの菓子名が記録されており、和菓子の系統や琉球的にアレンジされたものが多く残っています。現



復元された水山吹(みずやまぶき)。かつての琉球菓子にはこのように色彩豊かなものもあった。安次富さん提供

丁子は王朝の香り

記者：途絶えてしまった菓子で印象的なものは何ですか。

安次富氏：「丁砂餡(ティーサーアン)」という丁子(クローブ)の匂いをつけた焼菓子で、ペリーを歓迎した時にも登場します。戦後も食べられていたのですが、聞き取り調査では、世代によって色や材料などの変遷が激しく、現在に残っていません。丁子は清めの意味がある香料で中国でも用いられます。王朝の香りはこの丁子ではないかと思っています。



大巻餅(ウーマナムチ)安次富さん提供

語句解説

冊封使: 冊封とは中国皇帝が国王の地位を認める外交的な儀式のこと。この儀式のために派遣された使節団を冊封使という。
在番奉行: 那覇にある薩摩藩の出先機関の長。
江戸上り: 1609年の薩摩侵攻以降、徳川将軍と琉球国王の代替わりごとに使者を江戸に派遣すること。

首里城が復元された今、ぜひこういう菓子もアピールすべきだと思います。

琉球菓子再現の取り組み

記者：琉球菓子を含め、餅や饅頭などの伝統菓子は祭祀・行事などとの関わりが深いですね。

安次富氏：現在のイメージと異なり、茶菓子として出される琉球菓子以外は、祭祀行事の供物用がほとんどです。そのため残されている菓子や餅などがある一方、材料の使い方も時代や人々の嗜好で変化しているようです。伝統菓子は堅くて噛みこたえのあるものが多いですが、現代の菓子は柔らかいものが好まれますね。

記者：安次富さんの現在の取り組みは？

安次富氏：歴史資料と聞き取り調査をもとに琉球菓子の掘り起こしと再現を試みています。一品ずつ再現していくと、材料や作り方だけでなく、道具や食べる場面など様々な課題が出てきます。沖縄の食文化のひとつとして色んな立場の方と総合的な検討や再現ができればと思います。

記者：ありがとうございます。

首里城から

このコーナーでは首里城の職員を紹介します。



首里城公園管理センター 御庭案内 新屋美香さん

若衆姿で城内の案内を担当する新屋さん。首里城の歴史を解説しながら多くのお客様に接しています。最近では地域の小中学校の見学も増え、子供たちの素朴な質問にはタジタジの場面も多々ある。「子供たちをきつかけに、次回からは親子で首里城に来られる機会があればと思います。地域の方にも散歩がてら立ち寄ってもらい、琉球の歴史を発見してほしいです。」

編集会議へ参加しませんか？

琉球歴史回廊とは、地域の歴史文化を大切にしたい地域住民自らによる地域づくりの活動です。それぞれの地域資源が多岐にわたる手によって「気づき」「守り」「活用」しながら、琉球弧全体に広がっていくことを目的としています。

首里かわらばんでは、首里地域の歴史文化を築き上げる情報紙づくりを目指し、各号二回の編集会議への参加者を随時受け付けています。今回は首里在住の林由紀子さん、山城岩夫さんに、取材や執筆のご協力をいただきました。

●お問い合わせ：事務局 〇八六二一三九〇

琉球歴史回廊 首里かわらばん第4号
2006年3月発行
編集 琉球歴史回廊推進協議会事務局
(内閣府沖縄総合事務局開発建設部公園調整官室内)
〒900-8530 那覇市前島 2-21-7
TEL 098-862-2390 FAX 098-866-9049
発行 (財) 海洋博覧会記念公園管理財団
首里城公園管理センター
〒900-8815 那覇市首里金城町 1-2
TEL 098-886-2020 FAX 098-886-2919
タイトルデザイン 石原左内
琉球歴史回廊
<http://www.dc.ogb.go.jp/kyoku/kairo/index.html>
首里城公園
<http://www.shurijo.com/>